

## 「ルービックキューブを揃えるために」

「あれ？これ誰か入ってる？」僕はとある店のトイレに入った。僕には取っ手の部分にある、中に人が入っているのかを外に知らせる表示の色が、赤か緑か分からなかった。ドアをノックしてみるが返事はない。そこでやっとトイレの中に人がいないことが解った。

「色覚異常」という症状を僕は持っている。「色盲」と呼ばれることも多く、色の認識に異常があり、正しい色が判断できない事を言う。僕はものすごく軽度で、日常生活に困ることがほとんどない。しかし、重度の人は日常生活で大きなハンデになってしまう。

小学校5年生の時、机の片隅においてあるものに目がついた。それは色が揃っていないルービックキューブだった。手にとって回してみたがまったく揃えられずに、ただ色の配置が変わっていただけだった。僕は何とかしてそのルービックキューブを揃えようと思い、ネットで揃え方を調べ、そこからルービックキューブにハマっていった。ルービックキューブは上下左右前後でそれぞれ六色の色が使われていて、正しい回し方をすることで色を揃えていく。では重度な色覚異常の人がこれをやろうとするとどうなるだろうか。色覚異常の人は六色の色が見分けられない。つまり、ルービックキューブ本来の遊び方である「色を揃える」ということができなくなってしまうのだ。またルービックキューブだけではなく、色が見分けられないので、信号機の色も分からず、配置だけで進んで良いのかを見分けることになる。このように自分たちが日ごろ当たり前のようにやっている動作までもが十分にできなくなってしまうのだ。

そして色覚異常による生活のしづらさは、これだけではない。これまで色覚異常を理由にたくさんの人々が差別を受けてきた。色の認識ができない人は普通じゃないと思われ、拒まれてしまう。「なぜ色が正しく認識できないんだ」と否定されてしまったり、「嘘をついているんじゃないか」と疑われてしまったりしてしまう。こうして差別が起こる。

差別はなぜ起こるのか。それは自分とは違った行動や考え方を理解できず、それに対する違和感や恐怖感によりそれらを遠ざけようとするからだと思っている。

「箱の中身はなんだろう」というゲームを知っているだろうか。テレビなどで見たことがあるだろう。中の見えない箱の中身を手の感触だけで当てるゲーム。自分が見たテレビの中では回答者が箱の中身が分からないためになかなか手を入れられずにいた。しかし、実際には箱の中にたわしが入っているだけだった。普通だったら、たわしを触ることくらいなんてことないはずだ。しかし、回答者はたわしにビビってしまったのである。

このようなことがなぜ起こるのか。これはゲームのルールの中に隠されている。その原因は「回答者には箱の中身がわからない」ということにある。箱の中に何が入っているのかわからず、自分が嫌いなものや危険なものが入っているのではないかという恐怖感から手を入れることができないのだ。

これは差別においても同じだと思っている。自分が理解できない色覚異常という症状を持っている人に対して、違和感や恐怖感を持ち、それらを遠ざけようとしてしまう。しかし実際には、「色が認識できない」という症状を持つだけのただの人間だ。お互いを解り合えばなんてことないはずのことでも、お互いを理解しきれないうちにその人を遠ざけてしまう。そして差別が起こってしまう。

僕はこんな現状を変えたいと思っている。「色覚異常の人は変だ」という固定概念の箱を見るのではなく、色覚異常について学んだり、その人について考えたりすることで一人の人間という箱の中身を見てほしい。そしてそのことについて自分たち一人ひとりがしっかりと考え行動することで、差別がなくなっていくと僕は確信している。

ルービックキューブはすべての色を揃えるために、たくさんの工程が必要になり、努力が必要になる。「みんなで手を取り合いながら、差別のない世界というルービックキューブを揃えていく。」それが僕の目標だ。